ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第 3 番

1797～98 年に作曲されたベートーヴェン最初のヴァイオリン・ソナタ集である作品 12（全 3 曲）は、アントニオ・サリエリに献呈された。「第 3 番」になると、楽曲構成が一段と大きくなる。変ホ長調という調性によって柔らかな含みのある響きが生まれ、豊かな感情表現を獲得している。3 楽章からなり、第 1 楽章はソナタ形式のアレグロ・コン・スピーリト。流れるような旋律の第一主題、華麗な第二主題がそれぞれピアノと短い掛け合いを行ないながら進む。第 2 楽章のアダージョは三部形式。澄んだ主題がピアノで奏され、若き日のベートーヴェンの感情が詰まったような美しさを聴かせる。少し憂いを含んだ中間部も心にしみる。第 3 楽章はロンド形式。ピアノ独奏で始まる溌溂としたロンド主題が展開されるなかに第二主題の素朴な旋律が挟まれる。いずれもベートーヴェンらしい茶目っ気に満ちている。

シューベルト：ヴァイオリンとピアノのための幻想曲

1827～28 年に「ボヘミアのパガニーニ」の異名をとるヴァイオリンの名手ヨーゼフ・スラヴィークのために作曲され、初演もスラヴィークによって行なわれた。ヴァイオリンのための自由な形式の幻想曲で、全体は間断なく演奏されるが、大きく 4 つの部分に分けられる。アンダンテ・モルトで始まる序奏は、幻想的な雰囲気。続いて可愛らしい主題のアレグレット、次のアンダンティーノは変奏曲で、主題と 4 つの変奏からなる。主題に用いられたのは 1822 年に書かれた作曲家自身のリート《挨拶を送ろう》D741。最後の部分は序奏に戻って次第に高揚し、エネルギッシュなアレグロ・ヴィヴァーチェから、アレグレットで《挨拶を送ろう》の主題が回帰し、全曲のコーダとなるプレストで幕を閉じる。

モーツァルト：弦楽五重奏曲 第 3 番

モーツァルトは生涯に 6 曲の弦楽五重奏曲を残した。弦楽四重奏に（ボッケリーニのようにチェロではなく）ヴィオラを加えた編成である。1787 年、モーツァルト 31 歳の時の本作は、3 曲（K.406、515、516）をまとめた楽譜予約出版のために書かれた。第 1 楽章はソナタ形式のアレグロ。内声の 3 つの楽器が和音を刻むなか、ヴァイオリンとチェロが声を交わすように力強い主題を奏でる。ほとんどテンポを緩めることなく歌われる第 2 主題は、水がすべり落ちるような典雅さ。初版では第 2 楽章と第 3 楽章が現行のものと入れ替わる。第 2 楽章アレグレットは、複合三部形式のメヌエット。たゆたうようなメヌエットに対して、トリオではヴァイオリンが快活に疾走する。だが、明確に対比を狙うわけではなく、混然一体となって音楽が進行する。アンダンテの第 3 楽章は展開部を欠くソナタ形式。優しいメロディが横溢し、チェロの伴奏音型さえも歌っている。アレグロの第 4 楽章はロンド・ソナタ形式。2 つの主題をもとに 5 声が入念な対位法を繰り広げる。